

定本山頭火全集

第三卷

春陽堂版



定本 山頭火全集 第三卷

昭和四十七年六月二十六日 第一刷発行

著作者 種田 山頭火

発行者 和田 欣之介

東京都中央区日本橋通三八

発行所 株式会社 春陽堂書店

印刷 三協美術印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

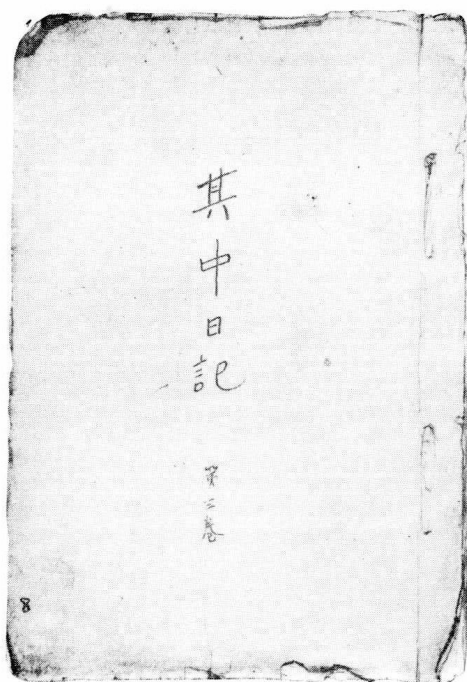
目次

其中日記(二)		一
近行乞記(室積)		一七三
近行乞記(北九州)		二〇四
近行乞記(伊佐)		二三四
其中日記(三)		二六一
近行乞記(大田)		二七〇
近行乞記(山口)		二九六
近行乞記(仙崎)		三三〇
近行乞記(大田から下関まで)		三四三
近行乞記(広島・尾道)		三六三

其中日記(四)		三九五
旅日記(東行記)		四五五
解 說(大山澄太)		五七三

其中日記(二)

〔自筆ノートⅡその八 写真はその表紙。昭和八年一月一日より三月十九日までの庵住日記である。第一頁に次頁の文章を掲げている。〕



其中日記は山頭火が山頭火によびかける言葉である。

日記は自画像である、描かれた日記が自画像で、書かれた自画像が日記である。

日記は人間的記録として、最初の文字から最後の文字まで、肉のペンに血のインキをふくませて認められなければならない、そしてその人の生活様式を通じて、その人の生活感情がそのままざ／＼と写し出されるならば、そこには芸術的価値が十分にある。

現在の私は、宗教的には仏教の空観を把持し、芸術的には表現主義に立脚してゐることを書き添へて置かなければならない。

〔昭和八年〕

うらかにして

木の葉ちる

一月一日

私には私らしい、其中庵には其中庵らしいお正月が来た。

門松や輪飾はめんどくさいので、裏の山からネコシダを五六本折ってきて壺に挿した、これで十分だ、齒染を活けて、二年生きのびた新年を迎へたのは妙だつた。

お屠蘇は緑平老が、数の子は元寛坊が、そして餅は樹明君が送つてくれた。

いはゆるお正月気分で、敬治君とつしよに飲みあるいた、そして踊りつづけた、それはシャレでもなければデョウダンでもない、シンケンきはまるシンケイおどりであつた！

踊れ、踊れ、踊れる間は踊れ！

芝川さんが上海からくれた手紙はまことにうれしいものであつた。

・お地藏さまもお正月のお花

・お正月のからすかあかあ

樹明君和して曰く

かあかあからすがふたつ

・シダ活けて五十二の春を迎へた

一月二日

今夜は樹明君といつしよに飲みあるき踊りつづけた、あゝ何と酒がうまくて、何と踊のかなしかつたこと！

山手閑居。

一月三日

今日は樹明君、敬治君と三人で遊んだ、遊びつかれて、夜おそく帰つてきた。

私はひとりで涙を流して笑つた、そしてこん／＼として睡つた、天国の夢も地獄の夢も見なかつた。

一月四日

曇、お正月もすんだ、すべてが流れてゆく。

アルコールのない、同時にウソのない一日だった。

茶の花やお正月の雨がしみく

・お正月の鉄鉢を鳴らす

また／＼人が来て金の話を^{カネ}していった。

一月五日

雨、寒い、そして静かだ。

夕方、樹明君がきてくれた、そしておとなしく帰っていった、大出来、々々々。
米がないから餅を食べる。

夜の雨はよかつた、閑寂そのものゝやうだった。

一月六日

小寒入、時雨。

雨を聴きつゝ、完全に自分を取り戻した。

△乞食になつて、乞食になりきれないのはみじめだ。

餅もなくなつたから蕎麦の粉を食べる。

今日がほんとうの新年だつた、私にとつては。

しづかなよろこび。

△まづしくともすなほに、さみしくともあたゝかに。

自分に媚びない、だから他人にも媚びない。

気取るな、威張るな、角張るな、逆上せるな。

△腹を立てない事、嘘をいはない事、無駄をしない事。

私は執着を少くするために、まづ骨肉と絶縁する、そしてその最初の手段として音信不通にならう（賀状なんかもさういふ方面へは一切出さなかつた）。

私は私を理解してくれる、そして私が尊敬する友といつしよに、友に支へられて生きよう、生きられるかぎりは。

・ 枯枝の空ふかい夕月があつた

罌の火の番の唄

雨のお正月の小鳥がやつてきて啼く

空腹かかへて落葉ふんでゆく

・枯木ばちばち燃える燃える

誰も来ない夜は遠く転轍の音も

宵月に茶の花の白さはある

・三日月さん庵をあづけます

一月七日

寒の雨、考へさせる雨だ。

△一杯の酒は甘露だった、百杯の酒は苦汁ニガリとなった。

清貧に安んじて閑寂を楽しむ、さうなる外はない、それが時代おくれであらうと、何であらうと。何のための出家ぞ、何のための庵居ぞ、落ちつけ、落ちつけ。

「身のまはり」

三日の夜から今朝まで考へつづけた、そして或る程度の諦観を握ることが出来たので、掃いたり拭いたり、身辺を整理した。

あるのは命だけだ——まだ命だけは残つてゐる。

さびしい昼餉だった、ソバノコだけだった。

△やつぱり、昨日を思はず明日を考へず、今日は今日を生きる、これがやつぱり、私の真の生活である。

夕方ひよつこり樹明君来庵、私が落ちついてゐるので、それが彼にはさびしく、さびしすぎて感じられたのだらう、五十錢玉二つを机上に載せて置いて、さう／＼と歸つていった。

この壱円はほんとうにありがたかつた、私は樹明大菩薩を同じ道の友として持つてゐることを喜ぶ。さつそく店まで出かけて、米を買ひ醬油を買ひ焼酎を買ひ、煙草を買つた、そしてすっかり樂天老人となつた、ノンキナ ヨヂサン バンザイ！

八日ぶりに飯を炊く、それは明けてから最初の御仏飯でもあつた。

・ひとりで酔ふたら雨が降りだした

雨がふる逢ひたうなる雨が

・酔へばいろ／＼の聲がきこえる冬雨

(述懐)

煙草のけむり

五十年が見えたり消えたり

一月八日

晴、すこし胃が痛む、昨夜の飲みすぎ食べすぎのためだらう。

久しぶりに――八日ぶりに入浴した、二銭五厘の享樂である、からだもこゝろもさつぱりした。
△無理に垢をおとすな、無理におとさうとすると皮をむぐぞ。

檜の枯葉が声だして口をまねくやうだ

・ 風を、ぬかるみを、売りにゆく米二俵

茶の花や蜂がいつびき

雑草伸びたまゝの紅葉となつてゐる

虫がおしつぶされてゐる冷たいページ

・ 枝をはなれぬ枯れた葉と葉とささやく

・ 風がきて庭の落葉を掃いていつた

泥足袋洗ふにぽつとりどんぐり

・ 落葉踏みにじりどうしようといふのか

一月九日

徹夜した、といふよりもあれこれ考へてゐるうちに夜が明けてしまつたのである。

鹽に薄氷が張つてゐる、うらゝかな陽が射してゐる。

敬坊からの手紙は私をあまりにさびしくかなしくした、敬坊よ、しつかりしてくれ、しつかりやつてくれ。

麦飯を食べることにする、経済的理由よりも生理的、生理的よりも心理的理由から。

落葉の掃き寄せをふと見たら、水仙、私の好きな水仙がある、落葉の底から落葉を押し分けて伸び出したのである、生きるものゝ力、伸びるものゝ勢を見て、今更のやうに自然の前に頭がさがつた、私は落葉をのぞき雑草をひきぬいて、すまないけれど私の机上に匂うであらう水仙を祝福した。

夜、樹明、冬村の二君が酒肴持参で来訪、飲んで話した、こゝまではよかつたが、それからワヤになつた（もつとも私はあまりワヤにはならなかつた）、いふまでもなく赤い灯へ、彼女等のテーブルへ、泥酔乱舞の世界へ――。

更けて戻つてから、飯を炊き味噌汁をこしらへた、やれやれ、御苦労、々々々。

火鉢に火があり、米桶に米があり、そして酒徳利に酒があるとは、さてもほがらかな風景であるかな。

窓には銭入に銭があつてほしい！

・ここでわかれる月へいばりして

- ・霜の大根ぬいてきてお汁ができた
- ・たべきれないちしやの葉が雨をためてゐる
- ・落葉の、水仙の芽かよ
- ・曇つた寒空できりぼしきりつゞけてる娘さんで
- ・冬空、何をぶちこはす音か
- ・猿まはしが冬雨の軒から軒へ
- ・雨となつた夜の寒行の大鼓が遠く
考へてゐる電燈ともつた
- ・冬蠅よひとりごとというてゐた
- ・檜の葉の枯れて落ちない声を聴け

一月十日

曇、それもよし、雨となつた、それもよし。

御飯のおいしい日であつた、ことに葱のお汁がおいしかつた。

△食べるうまさはたしかに生きてゐるよろこびの一つである。

樹明君が昨夜から行方不明となつてゐることを聞かされて、私は昨日敬治君の手紙を読んだ時のや